

【特集】D. グレーバーと自由への展望：
〈労働〉と〈抵抗〉をめぐって（2）：亡命
的空間の理解に向けて：資本主義，相互扶
助，物質生活

Grubačić, Andrej / オハーン, デニス / グルバチッチ, アン
ドレ / 芳賀, 達彦[訳] / O' Hearn, Denis

(出版者 / Publisher)

法政大学大原社会問題研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

大原社会問題研究所雑誌 / Journal of Ohara Institute for Social Research

(巻 / Volume)

760

(開始ページ / Start Page)

58

(終了ページ / End Page)

79

(発行年 / Year)

2022-02

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00025458>

亡命的空間の理解に向けて

——資本主義，相互扶助，物質生活

デニス・オハーン， アンドレ・グルバチッチ／芳賀達彦 訳

序 論

マルクス主義

アナーキズム

「国家なき空間」のアナキスト史

見落とされているもの

経済の理解を啓く

世界＝システムの変動——組み込み，周期，分業，支配

国家なき空間か，亡命的空間か

離脱，発言，忠誠

結 論

産業時代以前のモデルには第三の区分（sector）——すなわち，非－経済という最も深い地層——が加わると述べるつもりである。資本主義の〔寄生の〕根が伸びながら，それが決して貫徹しえない土壌である。この最も深い地層はいまだ途轍もなく大きな溝を残している。その上にやってくる区分が市場経済という豊かな地表である。市場と市場のあいだを水平的な往来が飛び交い，たいていは供給・需要・価格の結びつきによって，一定の自律的な調整が働いている。そして，これらの区分に並んで，というよりはその頂点にやってくる区分が，巨大な猛獣たちが闊歩し，弱肉強食が掟と化している反－市場の領域（zone）である。この領域こそ——過去や現在，あるいは産業革命の前後を問わず——資本主義というものの真の棲家なのであった（Braudel 1982: 229–230）*。

序 論

歴史学（Scott 2010）や人類学（Graeber 2001）の分野に台頭したアナーキズムの新たな波に

本論文は，Denis O'Hearn and Andrej Grubačić, “Capitalism, Mutual Aid, and material Life: Understanding Exilic Spaces”, *Capital & Class*, 2016, Vol. 40 (1) 147–165 の翻訳である。*Capital & Class* 編集部および両著者より翻訳・転載の許諾のうえ掲載する。

* 訳注：フェルナン・ブローデル『交換のはたらき 1——物質文明・経済・資本主義 15–18 世紀 II–1』（みすず書房 1986：284）。ただし，ここではグルバチッチらの引用意図が伝わりやすいように，英語訳に即してあらためて訳出している。

よって、アナーキズムとマルクス主義の知的関連性が検討されている。それらの知における主要な相違は着眼点にある。つまり、マルクス主義が伝統的に搾取や支配関係に注目してきたのに対して、アナーキズムにおいては協同性（cooperation）が重視されやすい。マルクス主義においては依然として蓄積過程や資本主義的諸関係の分析が中心課題であるが、一方、近年のアナーキズム研究においては国家なき空間（non-state spaces）や、国家や市場の論理の及ばない実践が分析の対象となっている。本稿の目的は両者の議論の簡潔な架橋であり、二つの方法論が共に必要なのだと示すことである。これは今後の研究や理論化の呼び水であって、用意周到な議論とは言い難い面もある。本稿はアナーキズムとマルクス主義の知的本質をより深く省察するための入門的試論なのである⁽¹⁾。

本稿の論旨はそう難しいものではない。アナーキズムとマルクス主義の分析手法上の強みを折衷したいなら、国家なき空間に関する近年の知見に注目しながら、国家なき空間と資本主義との関係を考えてみるのが一つの手だ、という主張である。こうした国家なき空間を本稿では亡命的空間（exilic spaces）と呼んでみることにしたい。亡命的空間とは資本主義的諸関係や資本主義的過程の及ばない社会・経済領域と定義されよう。それは領土を持つこともあれば、資本主義的蓄積や社会統制に対して自律的な構造や実践を築こうとする試みの場合もあるだろう。以上を理解するための先駆者として、本稿ではピョートル・クロボトキン、歴史家フェルナン・ブローデル、社会学者カール・ポランニーやテレンス・ホブキンス、経済学者アルバート・ハーシュマンといった人物の名を挙げてゆく。

マルクス主義

世界資本主義の歴史的発展の分析の場合、先駆者たちの踏み固めた足場に従うのがよい。資本主義に固有の蓄積過程、生産という隠れ家、階級闘争、恐慌と回復の内在的傾向といった叙述展開において、いまなおマルクスの右に出るものはない。ヨーゼフ・シュンペーターやアルフレッド・チャンドラーらは、法人資本主義に生じる技術上・組織上のイノベーションが、生産力の国外（外部）移転と周期的景気後退を早める過程を説明している。ローザ・ルクセンブルクからレーニン、ポール・バラン、ポール・スウィージー、そして世界＝システム論に至る世界資本主義分析は、巨大独占資本や関連諸国家が、資本主義的商品生産の支配的でなかった地域を従属させつつ、世界経済を不平等に発展させてゆく過程を詳細に論じている。これらの議論は（上記の）ブローデルの描いた市場や資本主義の動態について見事に説明している。

しかしながら、下からの協同性や自己組織化について、つまり資本主義からの逃避や、その裂け目において可能となる実践について理解を深めたいならば、マルクスばかりを当てにするわけには

(1) アナーキズムとマルクス主義を接近させる試みは本稿が初めてではまったくない。ハリー・クリーヴァー（Cleaver 1994, 2000）やジョン・ホロウェイ（Holloway 2013）、またオートノミストのマルクス主義的伝統はこの点において重要な寄与を果たしている。また雑誌 *Capital & Class* の一人の批評者はマルクス主義者の Evgeny Preobrazhensky（1965）の著作と、アナーキストである Freddie Perlman（2002）の記述の相似性を指摘している。

ゆかない。ボアベンチュラ・ジ・ソウザ＝サントス (Boaventura de Sousa Santos) は、このような「棄てられた経験」(waste of experience) を取り戻すための「不在の社会学」(sociology of absences) の必要を説いている。

つまり、現に存在するにもかかわらず、現状 (Status Quo) のオルタナティブなどありはしないとして、不在扱いを受けている社会实践や社会制度に分け入ってゆく研究が求められる。歴史や現在のなかで実在してきた経験が、無数の烙印 (愚か、時代遅れ、くだらない、偏狭、非生産的等々) によって、存在しない扱いを受けてきた。さらに、これと関連する『出現の社会学』(sociology of emergences) とは、将来の具体的で夢想的で現実的な可能性を築くための社会学である。ソウザ＝サントスによれば「不在の社会学は、かつて削がれてきたものを既存の現実書き加え、現在 (the present) をより詳らかにする (……) 対して、出現の社会学は、現実の孕む可能性と期待を既存の現実書き加え、現在を啓いてゆく」という (Sousa Santos 2012 : 57)。

不在の空間は国境地帯や湿地帯、森林地帯、山岳地帯、砂漠地帯ばかりでなく、資本主義の内側にも存在している。人びとが直接民主主義と相互扶助を実践している日常的な場がそれであって、家庭や共同体、借家の中庭 (tenant yards)、教会や監獄もまた含まれる。現代的かつ歴史的な資本主義を理解するうえで、アナーキズムの理論的な強みは、亡命的空間の内側で発展してきた政治と経済における実践や制度を熟知していることだ⁽²⁾。「現実のユートピア」(Wright 2010) や「利他主義」(Sober & Wilson 1999) のように、逃避社会の発展させた特質はしだいに社会科学の一般的な主題となりつつある。一体どのような条件や場合のもとで、こうした特質が開花しうるのはか。経験的な比較研究によって、そのパターンや規則性を見極めることが可能となるだろう。

アナーキズム

協同性や自己組織化というものを初めて体系的に分析しようとした著作は1902年に刊行されたクロボトキンの『相互扶助論』である。通俗化したダーウィンの自然選択論から、「万人の万人に対する闘争」における適者生存という「弱肉強食」の発想が喧伝されていた時代にあって、クロボトキンは闘争ではなく相互扶助こそが生存競争における成功の鍵だと喝破したのである。クロボトキンのこの主張は競争的ダーウィニズムに対するロシア人文主義の批判に倣ったものだった。1909年にクロボトキンが残した筆によれば「ケスラー、セヴェルツォフ、メンズビア、ブランツというロシアの偉大な四名の動物学者たち、そこにいくらか見劣りするけれどもポリアカフを加えた五名は、さらに、ただの旅人にすぎないけれども、このわたし自身、ダーウィンとウォレスが闘争しか発見できなかった場所に、いくつもの相互扶助を見出している」(引用は Todes 1987 : 546 から抜粋)。

(2) 亡命的空間の概念は〔ジャマイカの都市下層社会の研究〕Gray (2004) によって紹介されたものであるが、本稿執筆者たちはこの述語をより広い歴史的な文脈に応用している。亡命は政治的・文化的次元の問題に留まらず経済的・社会的次元の問題でもあり、またジャマイカの都市史にのみ見られる現象というわけでもない。また、この空間は歴史や運動から切り離された空白のような物理的位置ではなく、動的な社会的産物であって、(その都度立ち現れる) 社会関係の構成的次元において捉えられる。

最終的にクロポトキンは次のように結論づけている。

もしわれわれが（……）「絶えず互いに闘争するものと、互いに扶助するものとのいずれが、最適者なりや」という問を自然に向かって発するならば、われわれはただちに、相互扶助の習慣を持っている動物が正しく最適者であることを知るのである。それらの動物は、生き残るべきより多くの機会を有し、かつその綱の中で、もっともよく知力と体力との発達を遂げている（Kropotkin 2012 : 6 = 大沢 1971 : 21）。

動物学における相互扶助の議論を人間社会に敷衍した点において、クロポトキンの議論には大きな革新性があった。その主張によれば、人間社会の発展段階——氏族（clan）、家族、村落、街、中世都市、近代初頭——に応じて、人間同士の溝を深めやすい社会組織や規制が現れるが、社会を下から組織する共通の方法としての相互扶助が、いずれの発展段階においても登場する。共同体は相互扶助を通じて、原始国家（proto-state）や〔国民〕国家の脅威に抗し、さらには資本主義的介入や抑圧の諸形態に抗い、その身を守ってきたというわけである。相互扶助の制度と所有的个人主義（possessive individualism）の対立はクロポトキンにとっての中心的命題であるが、その重要性は現代においても依然として失われていない。

相互扶助と所有的个人主義の制度の矛盾というクロポトキンの図式は、価値、生産、労力、時間といった社会的概念の発達という、より大きな理論的文脈において捉えなおされるだろう。資本主義においては、経済の概念は市場に著しく限定され、労働の概念は交換価値を生産する働き（労力）に限定されている。このため相互扶助の実践される家庭や共同体は非経済的な場として定義され、その価値は低く見積もられてきた（とりわけ、こうした領域を女性が担っている場合には顕著である）。この問題は亡命的空間の社会経済を把握するうえでの重要な問いを提起するが、この点については実体経済と形式経済の区別について記述するさいに言及する。

「国家なき空間」のアナーキスト史

「国家なき空間」の理解に向かった最大の野心的挑戦として、ジェームズ・スコットによる『統治されない技法』（Scott 2010 = 佐藤ほか訳 2013）の分析がある。これは国家から逃避する民たちの歴史を綴った、ピエール・クラストルの仕事の継承である。ゾミアと呼ばれる東南アジアの特定地域を主要対象とする地域研究であるけれども、国家なき生や帝国的野心の回避といった事柄は「白人開拓者」に征服された植民地の先住者や定住生活と放牧生活を行き交う人間たちにとっては至極ありふれた望みであった。無論、国家と人びとの接触の具体的な形態は事例ごとに異なるが、そうした事例は世界のいたる場所に見られるものであり、比較研究の大きな可能性が残されているという（同上訳書：3）。

スコットが記述するのは国家建設とその崩壊を通じて周縁社会が形成されるパターンである。国家難民と国家の臣民化を免れた者たちが混ざりあい、破片地帯（shatter zone）と呼ばれる周縁が作り出されてゆく。「国家形成は抗争を招き、人びとを国家の外部へはじき出し、その結果として

周縁部では避難地帯が数多く作りだされた。そこはあたかも国家という容器のかけらがしだいに蓄積していった「破片地帯」であり、民族的にも言語的にもきわめて複雑な地域であった」（同上訳書：8）。破片地帯は地勢的に到達しづらく、逃避に適した農業と社会組織によって成り立っている。

作物にも逃避に適した品種というのがある。険しい地形でも栽培可能で、測量、計測、課税の困難さから国家の手が届きにくい作物である。東南アジアではトウモロコシがそれにあたり、新大陸ではキャッサバが選び取られた。人びとはそれらの作物を利用しながら広大な地域に分散し、国家の組み込みに抗しようとする社会構造を作り上げていった。また「地勢の抵抗」を味方につけ、権力拡大をはかる国家の目論見から逃れてきたのである。

逃避社会で採用される社会構造は融通無碍な構造である。スコットによれば、それは「つねに変化を続ける無数の小規模単位」である。逃避社会の〔政治的、社会的、経済的な〕基礎単位とは世帯、「村落、部族、同盟〔といった〕暫定的で不安定な連合体」（同上訳書：39）であり、余剰を吸収しようとする宗教団体や政治組織も不在のため「社会階層は（……）平たく、また局所的」（同上訳書：22）なものとなる。さらに山地農民は新たな耕地を目指すために恒常的な移動状態におかれている。スコットによって記述される平等主義は、協同性の上に成立したものというよりも、むしろ分散や移動、著しい個人主義の土台に築かれている。それは自己統治（自治）の要求というよりも、統治されることを拒絶する望みにしがつたものである。たとえ山地民同士のあいだに相互扶助が存在したとしても、部外者の目の届かない水面下にしか姿を現さないだろう。スコットはさらに、山地民が文字を手放したのは〔国家権力による〕領有を妨げる意図的な戦略だと解釈する。（書かれた）歴史を持たない民は、文化的戦略の幅をできるだけ広げるために〔融通の利かない〕固定化した歴史を持たない道を選んだのだという⁽³⁾。

しかしながら、スコットは、国家なき空間に関する議論は現代には通用しないと述べている。地球全土を包囲する「近代国家」のもとに「距離という障壁を取り除く技術」が発達し、「地勢の抵抗の無力化」が進行すれば、もはや逃げ込める場所はどこにもないというわけだ（同上訳書：xii）。全包囲的な近代国家は、国家なき空間と国家なき民を囲い込み、遂には「征服支配」してしまった。そして「事実上、地球上のすべてが『管理された空間』になり、周縁が囲い込まれた時代」になってしまったのである（同上訳書：15）。

はたして国家なき空間や国家なき営為は現存しないのか。本稿の主張は時代錯誤のプロジェクトにすぎないのか。そんなことはない。そう主張するつもりである。というのも、スコットの政治・経済の分析は農業分野に限られているからだ。異質な経済活動に目をやってみれば、国家や市場の支配の及ばないものがいまだ存在しているのに気づかされる。つまり「距離という障壁を無効化する技術」によって逃避可能性のすべてが潰えたわけではないのである。

筆者らは、国民国家や局所的な国家、国家間システムには構造的な亀裂が存在しており、民衆による逃避的生産や相互扶助の実践が営まれているという研究仮説を立てる。（Holloway 2013 をみよ）。

(3) あまり関心が向けられないことがないものの、アパッチ〔アメリカ・インディアン〕社会にも、やはり国家に抗する視点がある。Basso (1996) をみよ。

また、現代メキシコのサパティスタのような運動を想起するならば、直面する脅威や要求される戦略こそゾミアと異なるものの、現代社会における地勢的逃避もまた、スコットのいうほどありえない状況ではないと指摘できる。

ラテンアメリカを分析しているラウル・ジベキ（Raul Zibechi）は、その著作のなかで現代都市における国家なき空間の可能性を提示している。ジベキによれば、新自由主義的ショック療法の結果、民衆と空間のあいだに新たな関係が生じているという。新自由主義の影響下に生じた膨大な国内移住と社会分裂が進行するなかで、貧困層による「新たな社会性の形態と抵抗の形態」が編み出されたのである（Zibechi 2010: 50）。民衆は主要都市から外れた地域、つまり資本から遠く離れており、その影響が限られる場所へと移り住んでいったのである。新たな居住地となった *asentamientos*（集落）は「分散的空間」（dispersed place）であり自律的な都市経済が備わっているという。

たとえば、南アメリカ大陸の南端地域（コーノ・スール）では「首都からの脱出（flight of capital）には、生産と従属という資本主義的諸関係からの脱出が反映されている」という。「自主独立の生産管理の形態」が、集落の何万もの住民の手によって立ち上げられたのである。たしかに市場との接点や、市場に対する依存は残っているが「生産の形態とリズムはいまや広範な部門が自主管理され、もはや資本や資本主義的分業の言いなりにはなっていない」（Zibechi 2012: 22）。ありとあらゆる零細企業を営んでおり、消費社会の廃棄する廃材をリサイクルに回している。住民自身の手による住居から公共広場、街路、市場、はては下水処理場や水道管理に至るまでの自前の居住環境が築かれている。ボリビアの都市エル・アルトの事例では労働人口の7割が家族経営もしくは零細事業に取り組み、飲食業や建設業や製造業に従事しているという。家族の成員同士はお互いの労働の仕方について教え合い、賃金の発生しない労働も軽んじられたりはしない。

ジベキの記述からは、エル・アルト住民と市場経済の関係性がこれらの活動を通じてどのように変わったのかは判然としてこない。たとえば住民たちの事業が大企業の下請化する傾向にあるのかは定かでなく、また資本主義経済における労働費用（人件費）の低下に、当該地域における労働力の再生産がどの程度関係しているのかも不明である。

このような構造的離脱の場合には、亡命的経済活動の内実を詳らかにすることは難しい。自律的共同体における最重要の問題とは、賃労働ではない活動を通じて互いの必要を満たしてゆくことにある。よって、無償の相互利他的な労働が人びとの自由な活動を保障しているのかどうか、それとも、それらの労働が世界システムの圧力を受けて、自給自足（self-provisioning）とはほど遠いもの（賃労働・貨幣収入・市場取引）に再び従属させられてしまうのか否かは重大である。フェデリーチ（Federici 2012）らの提起した再生産労働の諸問題を踏まえるなら、自律的共同体における最重要の問題がこうした点にあることは明らかだろう。

したがって、亡命的空間の中心的問題とは、それらの空間が資本主義的蓄積に対して持っている関係なのである。ここで重要となるのが実体経済と形式経済の区別である（Polanyi 1957; Hopkins 1957）。形式経済論者がしきりに論じるのは希少性であり、経済システムを成功に導くという経済効率（economising）の重要性である。これに対して、実体経済論者が強調するのは経済効率（節制）ではなく、人びとに必要な物を供給してゆく給付（provisioning）の重要性であり、（いうなれ

ば) 社会的剰余の有用な配分の問題である。

かくして政治組織と経済組織の関係が重要となってくる。亡命的共同体は、経済資源や人的労力の振り分け、剰余の配分をどのような方法によって決定するのだろうか。そこに私的所有権は関わってくるのか、さもなくば、土地やその他の所有形態はどのような方法によって振り分けられ、再分配されるのだろうか。亡命的共同体は自律的活動から剰余を生産するのだろうか。その場合、剰余の処分によって経済的自律性が高まり、ひいては世界資本主義と手を切ることが可能とならないだろうか。

〔ラテンアメリカでは〕首都からの脱出にともなって、選出された代表者(間接民主主義)に対する正当性は失墜している。ボリビアのエル・アルトやコチャバンバの都市空間では「後部座席の運転」(back-seat driving)として知られる直接的な民主主義の政治が実践されている。共同体や集団は「自分の前方(運転席)の人物」となる代表者を選出すると、選ばれた人物〔運転手〕を監督しながら指示を与えるのである(Zibechi 2010: 26)。しかし、これは代議政治〔代表制政治〕からの完全な脱却でないことに留意したい。委任者(代表者)を「前方の運転席に追いやる」ことで、共同体の内部ではオルタナティヴな直接民主主義を実践しつつ、同時に代議政治家に対して牽制を加えようとしているのだ。

見落とされているもの

協同性と自発的結社をめぐるクロボトキンの仕事を新たな研究の地平に引き継がねばならない。資本主義の発展と矛盾する相互扶助の凝縮する空間としての国家なき空間(亡命的空間)の比較研究である。スコット(Scott 2010)やジベキ(Zibechi 2012)といった現代的な研究者もふれる問題であるが、資本主義が人間のニーズを満たさないために表面化した〔利他的〕領域や、資本主義的な組み込みを切り抜けようとする領域が存在している。

だが、これらの研究は国家なき空間とそこに暮らす人間が資本主義世界システムの外部に存在すると想定している場合が多い。これに対して筆者らは、亡命的空間とその行為主体は世界資本主義の過程、制度、行為主体と干渉しあっているという仮説(予想)を立てる。この干渉によって、国家なき空間の自律的活動はどのような制約を被るのだろうか。あるいは、時間の経過につれて、それらはどう変化してゆくものなのだろうか。ブローデルの比喩に戻るなら、ユートピアの物質生活の土壌が豊かになるほど、資本の寄生の根を招き寄せてしまうにちがいないのだ。

筆者らは空間的脱出と構造的なそれを区別している。地理的な脱出の場合はわかりやすいが、亡命的空間は構造的な脱出だともいえる。たとえ人びとの労働や生産や売買が資本主義経済のなかにあったとしても、資本主義的蓄積の構造が組み込み切れない活動というものもまた存在している。ここでは国家や資本主義の内か外かと仮定するよりはライト(Wright 1978)の議論に倣ったほうが有益に思える。つまり国家や形式的労働に関して、人は矛盾的立場(*contradictory locations*)に立っているのではないだろうか。資本と国家中心の過程に引き込む活動もあれば、撤退の手引きとなる活動もあるというわけだ。生活の一部が資本主義の「内」に置かれる一方で、人びとは多大な時間と労力を費やして資本主義から逃れようとしている。この時間と労力こそ、ブローデ

ルが「物質生活」と呼ぶものの内実を指し、いまだ、資本主義がほとんど根を張ることのできずにいる場所なのである。

亡命的空間と資本主義との関係性を描き出すにあたって、その足がかりとなる研究は数多くある。本稿の出発点は相互扶助と所有的個人主義の諸制度の相克というクロボトキンの概念である。国家と資本が力を増すにつれて生産と価値の定義は変えられ、それらの内実は限定されていったが、生産や価値が以前の意味のまま理解される生活世界では相互扶助の命脈が保たれているのだ。ポランニー（Polanyi 1957）とホプキンス（Hopkins 1957）は、こうした〔生産と価値に対する〕理解の相克を実体経済と形式経済の区別のなかで部分的に考察しているが、これはより一層深めねばならない議論であるように思われる。そこで、以下ではまず「経済」の理解を啓くことから始めよう。次いで、複数の地域と人間が蓄積の過程に組み込まれる世界史の変動の文脈に亡命的共同体を位置づける。そして最後に、自律を求める人間と資本の利益を代表する人間との動的な相互作用を捉える足がかりとして、ハーシュマン（Hirschman 1970 = 矢野訳 2005）の著作の分析枠組みを紹介したい。

経済の理解を啓く

実体（subsistence）の問題を射程に入れた場合、生産の問題はどのように理解されるだろうか。筆者らは、広い意味での経済全体からすれば、生産とはその一部分にすぎないと述べてきた。そこでの価値とは人びとが生産に捧げると決めた時間と労力を指すのであって生産対象は物（material）でなくてもかまわない。亡命的空間の特徴となるのは（とりわけ資本主義によってその存命が危ぶまれる場合には）いかなる経済活動なのか。共同的な活動になりやすいのか。それとも相互扶助や平等に資する活動なのか。あるいは個人や世帯のレベルまで断片化された活動となるのか。流動的な所有（dynamic properties）とはいかなるものか。それは持続する所有なのか、あるいは、そうした所有によってヒエラルキーや不平等が再度もたらされてしまうのか。たしかに商品生産でないとはいえ、亡命的空間の生産と再生産を成立させる経済活動を、世界資本主義の蓄積に統合された経済活動と区別できるのだろうか。もし可能だとすれば、いかに区別されるのだろうか。

ホプキンスによれば形式経済（*formaleconomy*）とは主流派経済学の対象である。それは、希少な資源が（自己調整的だと期待される）市場を通じて際限のない欲望のあいだで分配されるシステムであって、獲得資源の活用を最大化する「経済効率（節制）」（*economising*）こそが問題となる。このシステムにおける成功的活動とは最小の費用（より少ない労働と資源の投入）で最大の成果を産出することである。しかし現実社会では、ポランニーの指摘するように、「自己調整的市场」とは国家や企業の操作の上に成り立った不完全な社会的産物である。また「経済効率」には不自由労働の使用や資源の不当独占といった、新古典派経済学が認識しない要素も含まれるのであって、これこそが蓄積と不平等発展の重要な源泉なのである。

これに対し、「実体経済」（*substantive economy*）には自分自身やお互いに与しあう多種多様の方法が含まれ、多くの場合、それらは市場交換の外部で営まれている。形式経済学の認識しない実体的活動としては互酬（お互いのために何かすること）、再分配（ある者から別の者に移譲するこ

と)、家計(自らの手による生産)、そして贈与がある(Polanyi 1957; Hopkins 1957; Mauss 1990)。経済的役割と経済的行為は社会制度や文化的な慣習に埋め込まれているのであって、「経済的」行為と「非経済的」行為(あるいは、それらの役割や制度)は幾重にも結びついているのである。つまり、司祭は貧者に施しを与え、共同体は村に訪れた異邦人に食事をもてなすというわけである。「納屋の軒上げ」の伝統などもこの一例である。

したがって一見すると形式的な市場経済は資本主義の世界のように映り、亡命的空間の含まれる実体的かつ市場外的な経済は資本主義の外部のように見えてくる。互酬や再分配においては価値法則ではなく有用性と必要に応じて資源が割り振られ、資源の利用や分配の問題は市場と支払い能力に決定されずに、各人の合意、直接民主主義、代表制、慣習によって定められる。

ただし実体的活動は第一に資本主義的蓄積との関係において捉えねばならない。家事労働と市場外的活動は近代世界システムの形成と拡張の初期段階から新たな地域を統合する戦略の要だった。市場外の活動は労働力を相対的に低賃金に留めるため、輸出目当ての活動などは収入の一部にすぎなかった家計活動(householdings)に押し込められた(Hopkins & Wallerstein 1987: 777)。再生産労働は労働費用を安価に抑えるための重要手段であって、実体経済は形式経済を補填し続けているのである。フェデリーチ(Federici 2012)は、実体経済のこの分野に対しては形式経済からの悪質な攻撃が続いていると述べており、資本主義への組み込みが継続的で未完の過程だという本稿の主張を明快に示している。たとえば新自由主義的グローバリゼーションにおける近年の段階においても、

何百万もの人間を自前の土地、仕事、「慣習的権利」から引きはがすグローバルな囲い込みの過程によって、また雇われる女性の増大によって、世界的プロレタリア化に歴史的な飛躍がもたらされている。自足的経済(subsistence economy)を破壊し、生存手段から生産者を分断し、何百万人もの人間を貨幣収入に従属させたのである……資本家階級はグローバルな労働市場を通じて主導権を取り戻し、蓄積過程を再稼働させ、生産=労働費用を削減したのである(Federici 2012: 101)。

これと同時に、世界各国で保守的なマクロ経済政策が採用され、年金や医療、公共交通機関等々への予算が打ち切りにあい、実体経済の持っている再分配の側面が切り捨てられている。この結果、再分配的だった活動の数々は今や市場化され、それらのサービスを購入する余力のない大衆のあいだでは、家庭や共同体の互酬や家計活動がより強く求められるに至ったのである。はたして、この事態は亡命的活動にとって追い風となるのだろうか。

この問いに答えるには形式経済と実体経済のより詳細な区別が必要である。より広い視点から経済というものを理解するために、以下のターナーの指摘に倣いたい。

生産を定義するならば、マルクスとエンゲルスの『ドイツ・イデオロギー』での予見的(programmatic)な「人類学的」定義から始めるのがよいだろう。『ドイツ・イデオロギー』の記述において、生産とは単なる生存手段の生産を意味しない。それは人間という存在、家族、協同性といった社会関係や新たなニーズを生産するものとしても理解される……商品生産では生産的とみなされる

活動の範囲は「経済」を形成する部分（言い換えれば価値（Value）の生産）に狭められ、これ以外の生産活動形態は「生産」から切り離され、生産者からはなおさら（*a fortiori*）切り離されるのである（Turner 1986：100）。

グレーバー（Graeber 2001）が記すように、資本主義以前の多くの社会にとっての「生産」（production）の対象には、人びとがその実行（doing）や製作（making）にエネルギーと時間を捧げることも厭わないという意味での「価値ある」事柄のすべてが含まれていた。そして、それらの価値あるものは、惜しみなく与えられることもしばしばであった（Mauss 1990）。おそらく、さらに重要なのは、多くの人間社会は大半のエネルギーを生存ではなく社会を生み出す（物品ばかりではなく人間の関係性を生産する）ために捧げているということである。

あきらかに、ここで広く定義されている経済には時間、働き（effort）、そして献身（commitment）の問題が関わってくる。働きの問題は献身の概念と切り離して考えることはできない。細部や質に対する熱意や創造性や関心といったものは疎外や強制力の影響を免れないが、同時に連帯や共感、希望といったポジティブな力の影響をも被るからである。ある人間が労働時間を目算する場合、そこには興味深い結果が生じるものである。つまり、労働者の働きが上司や経営者によって規制され、賃金に直結する場合、労働者は一日の労働時間を短縮しようと奮闘するが、労働者の働きが興味や創造性や連帯感にしたがった場合、その熱意は高まり労働時間は長引くものである。一日の時間配分や、労働と生活が分離される度合いは「発展」（Development）による多大な影響を被ってきた（この労働と生活の分離は、「経済」の資本主義的定義の核心に位置するものである）。さらにそれは「労働日」の過ごし方ばかりか、わたしたちの一日の過ごし方自体を根本から変えてしまったのである。

相互扶助が亡命的社会の基盤にあるかぎり、育児や家事といった骨折り仕事は無論の事、共同体を生産するための共同作業もまた亡命的共同体にとって欠かせない労働なのである。こうした労働には数々の文化的「労働」が関わってくる。エーレンライク（Ehrenreich 2007）が書いたように、文字言語以前、もしくは村落定住する以前の人間にとって踊りは石碑に刻まれるほど重要視される行為だった。神経科学の立証によれば「踊りは音楽と並んで社会的結合の役目を果たす技術として生物学的・文化的に共進化したものである。人類学や精神分析学の研究では（……）太鼓の律動や音楽の誘発するリズムカルな振る舞いが社会構成員の間に相互信頼を生じさせ、意識状態に変化をもたらすことが判明している」という（Freeman 2000：411）。

経済というものをこのように再定義した場合、ある驚くべき結論がもたらされる。もはや「労働」と「遊び」は相反するものではないということである。クロボトキンはすでにこの事実に気づいていた。かれは動物の観察を通じて、遊びをそれ自体が喜び（pleasure）の一形態となる創造的活動だと見極め、共同体や相互扶助の関係を構築する「労働」の一部と捉えたのである。

われわれは現に、蟻をはじめとして鳥類や最高哺乳類に至るまでのすべての動物が、遊戯や角力を好み、あるいは追っかけ合いあるいは捕え合ったりして遊び戯れることを知っている。多くの遊戯は、若い彼等が一人前に成長した後の態度や動作の修養のようなものであると言われているが、なおかく

のごとき功利的な目的を離れて、舞踏や唱歌と同じく、精力の汪溢——すなわち「生の享楽」および同種あるいは他種の動物と交際しようとする欲望——全動物界の著しい特徴である社交性そのものの現れでもある（Kropotkin 2012：25＝大沢訳 1971：69）。

遊びを通じた協同性や喜びは相互扶助という豊かな概念における見落とされた一面であり、また多くのマルクス主義者やアナーキストからも敵意をもって軽んじられがちだった。喜びのための協同性は「踊りや音楽と並んで」、生や楽しみや共同の絆の生産としての経済という、わたしたちの理解における根幹である⁽⁴⁾。

それにもかかわらず、「文明的」な人間はしばしば先住民を「怠け者」の典型だとみなし、「手ごろな」作物に頼っては「労働」よりも文化儀礼に力を注いでいると憤慨するのである。エーレンライクは、まさしくこうした憤慨に端を発する「祝祭や熱狂的儀礼へのグローバルな反対運動」が起こったと述べている。

北側のキリスト教圏の街々では、ある時代を境に音楽が鳴りやんだ。祭りの衣装は仕舞いこまれ、処分された。以前は街全体を沸かせた劇は中止となり、祝祭の儀礼は忘れ去られるか、あるいは牙を抜かれ、酷く不完全にしか残っていない。教会の聖域からは熱狂の可能性は追放され、路上や公共広場からも姿を消したのだった（Ehrenreich 2007：99）。

以後、祝祭は不満を吐き出し声を上げる手段として、下層階級や持たざる者に「占有」された。上流階級では「文明的」（恭順）なエチケットによって振る舞いが管理されるようになった（Elias 1969）。公共的な楽しみの終焉とともに「鬱病の流行」が到来し、17世紀イギリスで最初に流行ると次いで18世紀ドイツが罹り、そして遂には西欧諸国全体に蔓延したという（Ehrenreich 2007：129-131）。

肉体労働時には「怠け者」の先住民が、舞踏のような慣習の実践となるや「やる気」を取り戻す。一見すると矛盾のようだが、驚くにあたいることではない。つまり、この瞬間にわたしたちがふれているものこそ「価値」という存在なのである。とどのつまり「価値」とは、資本主義の労働統制や消費主義の疎外の存在しない瞬間に、人間が肉体的・感情的・精神的労力の発揮する方向を決定する調整弁なのである。資本主義の外部では、いったん自足が達成されたならば、とたんに経済の中心は共同体を生産することとなり、たいていそれは共同の楽しみを通じて達成される。だとすると「発展」とは、共同の楽しみを商品生産に挿げ替えることだとも定義できよう。亡命的空間の行為者たちが集散的な楽しみの表現に多大な時間と労力を捧げる一方で、資本や国家機関はクレアリーが「24／7資本主義」と名づけたものに向かって邁進している。ここには相互扶助と所有的個人主義の相克というクロボトキン流の弁証の行き着いた先があるのだろうか。

(4) 亡命的共同体における楽しみの重要性を指摘してくれたデヴィッド・グレーバーに感謝の意を表したい。

世界＝システムの変動——組み込み、周期、分業、支配

「経済」を狭く定義したままでは、亡命的空間や亡命的活動を認識することは到底できないばかりか、共同体そのものの生産や主体間の関係性の生産といった事柄にも対応できない。しかし、物質生活を十分に理解しようと努めるならば、この問題のほかにも、世界システムの変動が諸地域に及ぼす影響について説明しなければならない。ウォーラーステイン（Wallerstein 1988）の描くように世界経済は国家間システム（インターステイト・システム）のもとに結びついた複数の国家の不平等な権力関係によって構成されている。このシステムは諸国家の寄せ集めという以上に、価値法則の規則と仕組みが圧倒的に優位となる序列化された構造である。程度の差こそあるものの、このシステムでは特に中核国において組織された資本が長期にわたって利潤を蓄積しやすい条件が整いやすいように保障されている。また資本蓄積の進行とシステムの拡張にしたがい新たな労働、資源、市場の飽くなき探求が続けられる。システム内部の資本主義が強度を増してゆく局面とは、新たな地域が手つかずの労働力とともにシステムに組み込まれる瞬間である。しかし、価値法則に抗するせめぎ合いは常に存在しており、なかでも直接生産者らの抵抗が挙げられよう。人びとは仕事場での搾取と疎外を無くすために戦い、市場に買い叩かれぬよう奮闘し、より大きな権利を求めて「おそらく誰にもまして」政治領域で闘争しているのである（Hopkins & Wallerstein 1987 : 765）。

世界システムにおいては、経済成長は時間と空間を超えて不平等な展開を見せる。特に景気後退時には世界経済を再編する圧力が生じ、新たな地域が引き込まれるだけでなく領域間の結びつきの不平等な刷新と強化が進行する。また、システムの再編局面では、たいいてい新たな覇権地域の台頭が付随する。世界を経済的、政治的、軍事的に支配する単一地域である。覇権地域の形成にはいずれも地球規模の新たな生産体制が関連する。たとえば、オランダの場合は中継貿易であり、イギリスの場合は綿糸産業の後に鉄道業と鉄鋼業が登場した。アメリカの場合は耐久消費財であり、後にコンピューター産業が登場した。さらに、イギリス型の領土基盤の植民地帝国支配や、アメリカ型の直接投資基盤の帝国主義というぐあいに支配形態の特徴も反映される。ただし、このような体制類型の規定においては地域ごとに多様なバリエーションが存在する。

システムの外に存在してきた領域にとって組み込みは何を意味するのか。また、組み込み済みの地域に対しては、システムの変動はどのような影響を及ぼすのだろうか。さらに、国際的な生産体制の優先順位の変動によって、既存の地域が「再組み込み」や生産の転換を迫られた場合、どのような結果がもたらされるのだろうか。一番単純なレベルでは、組み込みとはシステムの外の地域を内部に引き入れ、局地的活動を資本主義的世界経済の優先に適合するよう再編することを意味している。ウォーラーステインによれば、これは（1）地域の特定の諸活動が世界規模の分業にとって「不可欠」となるような生産体制の転換であり（2）国家間システムの一員として、その規則にしたがって国家体制が運営されるように政治機構を変容させることを意味している（Wallerstein 1988 : 131 = 2013 : 157-158）。

しかし、システムのいかなる部分にせよ、組み込みとそれ以後の変動は、組み込む側と組み込ま

れる側の地域間の特定の歴史的な力関係に左右される (McMichael 1990)。中核諸国と資本の動向と欲望は大きな影響力を有するが、それですべてが決定されるわけではない。地域勢力は外部権力からの操作の目論見に対して多少なりとも影響を与える可能性を持つものである。

システムの変動を理解するための以上の関係論的なアプローチは地域経済や局地的経済の発展を理解するうえでも重要である。トミック (Tomich 2003) とキハノ (Quijano 2000) のアプローチでは、資本主義的世界経済とは相互に連関しあう様々な過程を通じて構築・再生産される具体的な歴史の実体として捉えられている (常に特定の歴史が反映され、相互に影響を及ぼしながらも社会的・歴史の全体像へと統合されてゆく過程である)。資本主義的世界経済とはたんなる経済的過程の集積という以上に、全体 (global) と局地 (local) の統一を前提とした政治的権力、社会的支配、経済活動を統合する網の目なのである。

したがって、組み込みは中立的 (impartial) かつ矛盾に満ちた過程なのであり、これは現在も変わらない。組み込みの過程では、歴史的な労働形態 (農奴制、奴隷制、小規模商業生産、互酬性など) は資本に奉仕させられ、資本主義の核心である賃労働形態をとまう世界規模の分業へと統合されていった。新たな労働形態が生み出されたかと思えば、旧来の労働形態が新たな装いで復活することもある。

国民国家は、異質な労働形態を接合するだけでなく、集合的権限の配分を支配する別々の歴史的形態を接合する。資本主義的近代における社会権力の関係性は単線的でも一方向的でもなく、また、すべての権力関係が政府という単一体制に収斂しているわけでもない (Quijano 2000 : 7)。むしろ、世界資本主義は歴史的な駆け引きと構造的雑多性のもとに成立した全体である。つまり、一つないし複数の構成要素が優位性を持つものの、しかし決定要因や決定基盤にはなりえないのだ (Tomich 2003)。

かりに資本主義的世界経済が複雑に構造化された全体だとみなされるのなら、歴史社会学の役割とは、資本主義 (全体) によって生み出されながらも、同時に資本主義を構成している局所的経験 (local experience) の史的展開を再構成することである。地域的特殊性 (local specificities) は、当局と亡命的共同体の駆け引きと相互干渉において、また所与の時点でのそれらの帰結を問うにあたって特に重視されるべきである。さらに地域的特殊性は様々な離脱戦略の有効性にとって決定的であり、また成功裏に自律を確保するための機会にとっても決定的なものである。この点には亡命的生産の諸可能性の本質や、亡命的共同体と当局の駆け引きの本質も関わってくる。以上の駆け引きは亡命的共同体と地域権力のたんなる局地的交渉ではなく世界経済の文脈から問わねばならない。そして、亡命的共同体そのものを取り囲む地域が世界システム体制やその過程に (再び) 組み込まれるにつれて、この問いの重要性はますます高まることになる。

この過程には鍵となる二つの要素が関連しあっている。第一に、亡命や潜在的亡命への統制力を発揮する国家に対してグローバルな変動が及ぼす影響である。第二に、新たな経済活動や経済単位が労働力や資源の需要に対して与える変化である。国家に関しては既存の政治構造を再編成するか排除するかして新たな構造に置換する必要がある。これには精妙なバランス感覚が求められる。「国家の力が強すぎれば商品、資本、労働力の流通 (flow) の妨げとなるし、弱すぎても他の存在 (特にその法的管内の存在) による妨げを止められない」 (Hopkins & Wallerstein 1987 : 778)。組

み込みの主要目的が世界資本主義のオルタナティヴを次々に排除することである以上、局所的国家は亡命的な民衆、共同体、空間に対して、ますますの統制を發揮せねばならない。このため（1）強制、懐柔、誘惑を通じて大量の輸出商品の生産が差し向けられたり（2）地方政府に対する外圧を強めるために直接民主主義とその担い手／委任者への介入がなされ、それらの者が当局や外部の任命した代表者に挿げ替えられる、といったことも起こりうる。以上がどのように起こるかは亡命的空間に関する研究の主要課題である。

換言すれば、組み込みの局面に応じて、亡命的空間の現実と可能性はどう異なるのかということだ。局所的国家が世界経済の外部に存在する局面、組み込みの渦中と組み込み直後の局面、そして、以後に継続する世界経済再編時の再度の組み込みという局面において、そこにはいかなる差異が生じるものなのか。覇権体制や経済部門の変動、世界的・地域的分業の影響によって、いかなる制約や可能性が生じるものなのか。スコット（Scott 2010）の提示した仮説は、国家なき空間は旧来の世界時間に属するため、世界的な蓄積と国家形成が進むにつれて、ますます特異な存在となってゆくというものである。この仮説に代えて、筆者らは、亡命的空間の形態が世界時間を超えて変化している可能性を示すつもりである。特に、かつての逃亡が主として空間的なものだったとすれば、現代の逃亡空間は、資本主義のなかに隙間や亀裂を生み出し、そこで共同体の相互扶助や直接民主主義を实践する構造的離脱となっている可能性がある。この種の逃亡は以前に比べて狭い範囲のものであり、特に資本主義的諸関係を出入りせねばならない現実的な制約をとまなうかもしれない。だとすれば、ここに亡命の持続可能性に新たな懸念材料が生まれている。

国家なき空間か、亡命的空間か

スコットやジベキの著作をはじめ、様々な主題——コサック（Boeck 2009）、海賊（Linebaugh & Rediker 2000）、マルーン共同体（Price 1996）、現代のバラック居住者（shack dwellers）（Pithouse 2006）、都市下層（urban dwellers）（Gray 2004）——の関連研究をまとめれば、亡命的共同体の比較研究によって非常に重要な論点もたらされる可能性に気づくだろう。これは資本主義的蓄積や搾取、疎外に関するマルクス主義的分析とも重なる論点である。既成概念に腐心するのもよいが、研究者や活動家たちは、スコットやジベキらの見落としてきた事柄を念頭に置きながらこの研究に真剣に取り組んでみるのはどうか。

国家なき空間に関するスコットの議論は説得的であるが、資本主義についてはほとんど言及がみられない。また驚くべきことに自治や相互扶助に関しても、きわめてわずかな言及しかない。そのため幾つかの問題が未着手である。第一に、近代国家が十分に理論化されておらず、初期農耕社会とさして姿を変えぬまま強大な能力と権力技術を獲得したにすぎない局地的存在のように描かれている。第二に、囲い込みの問題が資本主義的世界経済への組み込みという各地に特有の過程から概念的に切り離されている。かくしてスコットは囲い込みを、あたかも普遍的で完了済みの過程かのように扱ってしまうのである。これに対し、筆者らは囲い込みを多様で矛盾を孕んだものとして、また不完全かつ進行中の過程と捉える。本稿が現代の資本主義的世界経済内部の亀裂の研究を重要と考えるのはこのためである。

ジベキの議論にはスコットと違い政治経済学的手法（資本主義分析）が採用されているが、歴史が扱われていない。しかし、クロボトキンが相互扶助の歴史について考察したように、歴史的視座に立つならば、国家なき空間や市場なき活動の出現がなんら突発的でも予期せざる出来事でもないことがわかる。ジベキは「民衆と国土の新たな関係性」（p.16）を見出したというものの、はたして、この関係性は本当に新しいものと言えるのか。新しいとすれば、それはどの点においてなのか。たしかに所与の現象においては特殊な出来事かもしれないが、それらはまた、長期持続（longue durée）する史的資本主義に刻み込まれた、永続的な離脱の論理の反映とはいえないだろうか。筆者らは断裂や断絶というよりは、長期にわたる長大な歴史過程に目を向けたい。国家形成と国家解体、継続的で不平等な組み込みに対する亡命的な再領有、私的所有の制度への防禦反応としての相互扶助の創造といった歴史の流れに目をやるのである。

筆者らは国家なき空間を資本主義的世界経済における組み込みの特殊な産物だと主張しているのである。ブローデル（Braudel 1979：42）は手短にだが、国家間システムと資本主義的蓄積の領域外に構造化した自己組織的空間である「世界経済のブラックホール」の存在について書いている。資本主義的世界経済が外部領域を組み込む浸蝕過程で中核権力が取りこぼした領域の場合もあれば、（本稿の示すように）なんらかの理由から組み込みを拒否した人びとによる浸蝕への防禦反応の形態の場合もあるだろう。スコットの初期の用語でいえば、「ブラックホール」とは資本主義的世界経済における「底流政治」（*infrapolitics*）の現れであって、「おのれの名をあえて名乗らない無数の目立たぬ抵抗形態」と結びついている（Scott 1990：38）。底流政治は「表舞台の政治行動の代用品などではなく、それらを縁の下から支える土台」となるものだという（同上：58）。

世界資本主義の文脈においては、「国家なき空間」よりも離脱の空間や離脱の事例について言及するほうがはっきりしている。グレイ（Gray 2004）は、ジャマイカの都市下層の物的・心理的避難空間としての亡命的空間について言及している。グレイ自身はこうした空間を文化的な観点から定義しており、尊厳を損なわれた人間が社会的名誉を取り戻し、社会復帰を果たすための空間として描き出している。ただし、この概念には空間的亡命の意味と「わかりやすい社会（accessible society）」（この場合には資本主義）からの構造的離脱の意味もまた含意されている。厳密に言えば、亡命する人間は依然として当該社会の「なかに」いるのであって、社会制度に参加する場合もあれば、形式経済のもとで労働している場合もある。この場合の亡命的空間は、国家による侵犯と監視の彼岸というわけではなく、「恭順な」（civilised）社会からの避難場所と言えるだろう。ジャマイカでは、それらは街の片隅（street corner）、借家の中庭、路上、ゲットー地区といった都市空間の悪所に存在している。

そうした空間は文化的混交や「ブラック・パワー」の場であり、おまけにイギリスの植民地主義やアメリカの消費者主義といった支配的文化さえも取り込んでしまう場である。グレイ曰く、政治的に、この手の空間における「自治と自律への傾倒」は「自制から無規律」に流れやすいという（同上：118）。そこでの振る舞いはしばしば喧嘩っ早く無作法で、空間内の貧しい人びとに危害が及ぶことさえもある。しかし、ここには転覆性もまた孕まれるのであって、誰でも犯しうる微罪が当局から問題視されはじめ、犯罪撲滅の空気が政治的気運として高まった場合などは、こうした空間は大衆に対する影響力を発揮し始める。こうなるとギャングの若者や、政治的迫害により仕事を追

われた不熟練失業者、賃金労働に唾棄する露天商、最低賃金のルンペンプロレタリアート、学校中退の無職者たちの手で「イデオロギー的なルール破り」が横行しだすという。

グレイは亡命的空間の経済分析を避けようとするのだが、路上と借家の中庭の生態については語っている。そこは公共のパフォーマンス場であり、劇場であり、音楽とスポーツの空間であるという。この事実はモースやターナー、エーレンライク、そしてグレーバーの生産と価値の概念を想起させるものである。人びとが時間とエネルギーを捧げるのは、ただ生活の糧のみを生産するためではなく「人間という存在や家族、協同の社会的関係」を生産するためということだ（Turner 1986: 100）。

こんなふうに考えることは的外れだろうか。つまり、資本主義的世界システムの歴史とは、ある程度までは亡命的空間の自律的活動（self-activity）に対する闘争だったのだ、と。歴史を長いスパンで見た場合、世界的分業体制に地域的な経済活動や制度を組み込もうとする目論見は、なによりも自律的な経済に対する闘争だったといえる。資本主義的統制が家事や余暇など労働時間外の活動に口出しするのは、この闘争の現れでもある。組み込みとは、システム全体を横断する分業体制に新たな領土を統合する過程という以上に自己組織的な亡命的空間を統合する過程なのである。国家形成と資本主義的組み込みとは、なによりも人びとの脱国家形成の流れに対する抗争とみなせるのである。

グローバル資本主義システムの亀裂の内側に場所に根ざした（place-based）政治形態を生産する試みは、「資本主義的世界経済における底流政治」だと言えるだろう。底流政治は資本主義的世界経済における亡命的空間の生産にあたる。より正確には資本主義的世界経済における底流政治とは国家と資本のシステムの過程と手を切る過程——相対的に自律的な生産と流通の過程、そして部分的に組み込まれた亡命的空間と亡命的実践の過程——の現れであり、そして、亡命的空間と資本主義的世界経済のヒエラルキー的組織との継続的な敵対関係の現れなのである。このように定義した場合、底流政治は世界システムにおける恒常的な要素となるだろう。資本主義的世界経済の不特定地域における不完全で矛盾を孕んだ組み込みが亡命的空間とその実践を出現させる条件となっているのである。資本主義システムにおける普段の生活史のなかでは、これらはほとんど目に映ることはない（スコット [Scott 1990] の用語では、それらは資本主義的世界経済の「隠れた記録（hidden transcript）」の一部をなしている）。しかし覇権体制の移行期においては亡命的空間と亡命的実践は「より可視化された政治行動の形態」の条件となって資本主義的政治の「公式記録（public transcript）」に写り込んでくるのだ。チアパスの蜂起やジベキ（Zibechi 2012）の分析した構造的逃避の諸形態は資本主義近代の隠れた記録における長期に及ぶ結果と成果なのである。自己組織化と国家／資本構造からの逃亡という矛盾する諸過程への着眼は一部のマルクス主義的分析に孕まれる硬直的な機能主義と経済主義を退けつつ、スコットやジベキのようなアナーキストの分析に資本主義分析を加える手がかりとなるだろう。市場と国家の内側で、それらに抗し、またそれらを乗り越えようと生産されるこれらの興味深い空間に関心を向けることはアナーキズムとマルクス主義の知における両者の強みを明らかにしてくれるだろう。

離脱，発言，忠誠

最後に、意に反して資本主義的世界経済の内部に組み込まれた人間と、そこで不満を持つ者の持っている戦略上の選択肢を論じることで、本稿の締め括りとしたい。亡命的共同体は自らの身を守る相補的な三つの戦略を用いることができる。離脱 (exit)、発言 (voice)、忠誠 (loyalty) である。「離脱」は、資本・国家への様々な抵抗実践を含み、二度と捕獲されまいとする意図を持っている。「発言」とは、公然たる抵抗や、亡命的存在が国家と資本の構造に対して積極的に抗うための諸々の戦略を指している。最後に、「忠誠」とは国家や国家以外の機関に対する戦略的従属のことである (Hirschman 1970 をみよ)。

以上の戦略は亡命的空間の研究にとって重要な関心事項である。自律性を確立するためにはなんらかのかたちでの離脱が欠かせないからだ。批判的研究者は時代の経過にしたがって——原始国家が国民国家となり、国家間システムにおける覇権国家へと変化するなかで——国家がますます全包的な存在になりつつあると考えがちである。そのため、おそらく第一感としては逃亡／離脱か、捕獲／再捕獲かという選択肢こそが明白なオルタナティヴだとみなすだろう。しかし歴史的に見た場合、離脱の結果はそれほど単純ではない。国家は捕獲に失敗した場合でも、離脱者らをどうにかしようとするものであって、直接的な支配の及ばない存在に対しては取引が持ち掛けられるからだ。

離脱した存在が自律を維持するために代償を支払う場合もあるだろうし、離脱は酷い目を見ると他の者たちに思い知らせ、二の足を踏ませるために、国家機関が離脱した存在に対して「兵糧攻め」を企てる場合もあるだろう。自律的存在に取引を持ち掛け、自らに「忠誠」を誓わせるべく、なんらかの手段を講じて国家が対価を支払う場合もあるだろう。ジャマイカのマルーン共同体は国境周辺の警護の取引を持ち掛けられ、離脱が国家の脅威とならぬよう脱走者を捕えて送還する役目を果たしていた (Price 1996)。大西洋に出現した海賊は、じぶんたちの略奪行為をイングランドに黙認させる代わりに、イングランドの敵船を襲撃することに合意していたという (Linebaugh & Rediker 2000)。こうした事例は枚挙にいとまがない。

このような取引は持続するのだろうか。研究を進めるにあたっては、忠誠をめぐる取引の本質や亡命的社会への影響のみならず、そうした取引の揺らぎこそが重要な課題である。国家が境界を拡張し支配に対する「抵抗 (摩擦)」を克服したならば、亡命的共同体は食いつぶされてしまうかもしれない。さらに興味深いのは、世界システムの変動が亡命的社会そのものや亡命的社会と国家その他の存在との取引の帰結に多大な影響を及ぼす場合があるということである。

一つの事例として、世界システム変動局面におけるロシア国家とコサック共同体の亡命的社会との関係性を挙げてみよう⁽⁵⁾。ドン地方のコサックの社会は、新興ロシア国家とそこでの農奴制社会関係からの逃亡者たちによって構成されていた。18世紀以前、コサック社会は、牧畜と略奪とを生業とし、直接民主主義を基盤とする亡命的社会だった。農耕と私的所有 (私有財産) が禁じられ

(5) 本稿のコサック社会とサバティスタに関する分析は筆者らが Grubačić, A., O'Hearn, D. (2016) で展開した亡命的空間に関する分析の要約である。同書はまた隔離された囚人の置かれた状況から亡命的共同体についても考察している。

る代わりに、その領域へとたどり着いた亡命者のすべてを民族如何に無関係にコサックとして迎えたのである。コサックがその自律を守るために元来交わしていた取引は、皇帝（ツァーリ）に忠誠を誓い国境を警備する見返りとして、毎年多額の支給を受け取るほか、略奪の自由を咎められないというものだった。だが、世界システムの覇権がオランダからイギリスに移行すると、そこに付随した産業革命によって、それまでシステムの外部だった地域に対して産業経済の求める原材料を生産せよとの強い圧力が降りかかった。ロシア一帯が西欧社会にとっての「穀倉地帯」になると、世界市場に向けた小麦生産の圧力を受けたロシア国家はコサックに対して牧畜を農業に転換するよう要求しはじめた。さらに、コサック社会のエリートを優遇し、コサック共同体の政治的平等（自律）を掘り崩していったのである。ロシアの国家としての力が強大になるにつれて、またそれ自体が世界経済の構造に組み込まれるにつれ、コサックが忠誠を誓った取引はかれらの亡命的自律性を侵害するようになっていった。民主主義的実践やコモンズの保存、新たな亡命者の迎え入れといったものもまた、その後の世界システムの流れとロシアとの取引のなかで摩耗していった。私的所有が確立し、階級社会が到来した。自律を手にいれた離脱は自律なき離脱に変わり、遂には逃げ場さえ完全に失われてしまった。とはいえ、創始時点での亡命の原理は自律と相互扶助をめぐるものだったのであり、ドン地方に足を踏み入れた亡命者たちの求めていたものもそれと同じ原理であった（Grubačić & O'Hearn 2016 をみよ）。

クロボトキンの述べたように、悪辣な政府や社会統制の制度に直面した人間は、相互扶助と自律のオルタナティブな制度を懸命に生み出そうとする傾向にある。そして、近年のメキシコのサパティスタの亡命的経験には、コサックとの興味深い類似点が見られる。しかし、二つの事例は異なる歴史的背景を持ち、亡命者たちと国家／資本には異なる関係が成り立っている。ゆえに、ここには示唆に富んだ差異もまた存在している。つまり、〔亡命者と国家／資本の〕どちらの側もコサックの事例とは異なる戦略を用いて、取引相手の制御や回避を試みているのだ。

決定的なのは交渉力（bargaining power）の差異である。コサックは新興ロシア国家を外来的脅威から防衛する独特な立場に置かれていたため、一時の間、モスクワ大公国とも取引する力を持っていた。また、コサックの居住地そのものが国家にとって脅威となりうる領域だったために、モスクワ大公国はどちらにも実利の出るような忠誠取引に現実的な関心を見せていたのである。コサックの場合、亡命者たちの自律はこのようにして守られていた。一方、チアパスのマヤの人びと（メキシコ先住者たち）は、国家にとって有益どころか、ほぼ忘れ去られた人びとである。さらに、かれらは、ラカンドンの熱帯雨林地帯「テラスリウス *terra nullius*」（「誰の土地でもない」の意）を開発（exploitation）の対象だと決めつけている牧場主や資源目当ての人間の侵入を妨げている者たちである。この新自由主義の時代にあって、メキシコ政府が亡命者などよりも金儲けの好きの山師（fortune hunter）のほうを優遇するのは当然である。かくして、サパティスタが望ましい忠誠取引を国家に対して持ち掛ける可能性は端から限られていた。かれらには他の場所にパートナーを求めるほかなかったのである。ただし、国家の買収工作による自律性の崩壊というコサック社会の問題からも縁遠いため、サパティスタ社会では共同体の隅々まで自律が根づいている。自律（自治権）なくして亡命に意味なし、である。このため、資金調達（資源確保）に取り組むサパティスタは、共同体の自律性を脅かすおそれのない忠誠取引を結ぶことに努めてきた。国内や国際社会から

支援者を募る一方で、それら市民社会との取引が共同体の連帯を脅かしそうになるや、かれらは活動家や支援者の言質（サパティスタ共同体に奉仕したいという語り）を逆手に取りながら、取引内容を巧みに変更していった。

しかし、自律の問題は依然として世界システムのあおりを受けて悪化した生活の課題に直面している。サパティスタ共同体では特に若者の出稼ぎの急増が深刻である。若者からの仕送りは生活の問題を緩和するが、過疎の問題は共同体にとっては致命的で、なんとも悩ましい問題である。この問題に対応すべく、サパティスタは自分たちの亡命的共同体を前に進めるため、自身の亡命的実験にほかのメキシコ人共同体を招き入れることを決心し、「もうひとつのキャンペーン」（otra campaña）と命名された戦略を展開している。もしも「一国社会主義」がありえないとすれば、一つの領域内で完成する亡命（一領域亡命）もまたありえないということだろうか。サパティスタの闘争は現時点でも継続中であり、より大きな自律（自治権）に向かって前進しているようにみえる。一方、ドンコサックは正反対の方向に後退してしまった（たしかに、数十年と数世紀の時間の違いはあるけれども）。

結 論

本稿の議論の根底にあった着想は、ポランニーの「二重運動」のモデル——世界資本主義の発展によって物質生活への制限が課されるとき、民衆階級は（ある時は国家を通じて、またある時は自らの手によって）福祉（wellbeing）と自由（liberties）を取り戻すために奮闘するという運動——は相互扶助をまなざしたクロボトキンの眼鏡を通して再解釈できるのではないかというものだった。国家と資本の体制から、資本主義的「自由市場」や所有的個人主義の実践と制度を押しつけられるとき、人びとは相互扶助の仕組みや振る舞いを強化し、社交性（sociability）を再構築することで、これに応じるのである。そこでの特徴的な筋道の一つが亡命的空間と亡命的実践の創造だった。筆者らはこれらの空間と実践を、人びとや集団が国家権威や資本主義的経済過程から逃れようと試みる社会的・経済的な場として定義した。領土を持つものだろうと資本主義的蓄積過程や社会統制に対して自律的な構造を構築しようとする試みだろうと、定義上、それはささいな問題である。筆者らが亡命的空間の研究を提起するのは、願い（hope）を持っているからだ。わたしたちは別の社会が可能だという希望を抱いている。相互扶助の関係が軽んじられない社会、共同体の構築や楽しみを生産する労働が（願わくば）経済の核心なのだと再認識される社会、すくなくとも、それらが商品やサービスの生産と同じくらい大切なものだとして認識されるような社会である。あるいは、世界経済の政治の核心には、亡命的空間と亡命的実践の生産と流通があると認識することも可能だろう。筆者らは、政治に対してこのように迫ってゆく議論もまた、有益かつ必要のものだと考えている。世界システムの不協和音は、支配システムへの怒号や反システムの抵抗の声ばかりによって生み出されるものではない。この闘争は、きわめて静かでありながら、しかし挑発的であるような沈黙や拒絶としても現れるのである。この拒絶に身を委ねた人間たちは、かつては船に乗って旅をし、密林や草原や山奥に暮らしたのだった。とはいえ現代であっても、そうした人間たちは密林や山奥に存在しつづけている。そればかりでなく、サパティスタやアイマラ地方（ペルー先住

社会）に、さらにはキングストンやクルド人自治区、超大型監獄の獄中、占拠された広場、いわば都市の亡命的空間に息づいているのである。

(Denis O'Hearn, Binghamton University – SUNY, USA)

(Andrej Grubačić, California Institute of Integral Studies, USA)

※ 両著者の所属は本論文発表時のものである

(はが・たつひこ 大阪府立大学大学院博士後期課程)

【参考文献】

- Basso, K. (1996) *Wisdom Sits in Places: Landscape and Language among the Western Apache*. Albuquerque, NM: University of New Mexico Press.
- Boeck, B. (2009) *Imperial Boundaries: Cossack Communities and Empire-Building in the Age of Peter the Great*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Braudel, F. (1979) *The Perspective of the World: Civilization and Capitalism 15th-18th Century, Vol.3*. Oakland, CA: University of California Press [山本淳一訳『交換のはたらき1——物質文明・経済・資本主義 15-18 世紀Ⅱ-1』みすず書房, 1986].
- Braudel, F. (1982) *The Wheels of Commerce: Civilization and Capitalism 15th-18th Century (Vol. 2)*. New York: Harper & Row.
- Clastres, P. (1987) *Society Against the State: Essays in Political Anthropology*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Cleaver, H. (1994) Kropotkin, Self-valorization and the Crisis of Marxism. *Anarchist Studies* 2 (2) : 125-127.
- Cleaver H (2000) *Reading Capital Politically*. Oakland, CA: AK Press.
- Crary, J. (2013) *24 / 7: Late Capitalism and the Ends of Sleep*. London: Verso.
- Ehrenreich, B. (2007) *Dancing in the Streets: A History of Collective Joy*. New York: Metropolitan Books.
- Elias, N. (1969) *The Civilizing Process, Vol. I: The History of Manners*. Oxford: Blackwell [赤井慧爾・中村元保・吉田正勝訳『文明化の過程・上〈改裝版〉——ヨーロッパ上流階層の風俗の変遷』(叢書ウニベルシタス) 法政大学出版局, 2010].
- Federici, S. (2012) *Revolution at Point Zero: Housework, Reproduction, and Feminist Struggle*. Oakland, CA: PM Press.
- Freeman, W.J. (2000) A Neurobiological Role of Music in Social Bonding. Wallin, N., Merkur, B., Brown, S. (eds.) *The Origins of Music*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Graeber, D. (2001) *Toward An Anthropological Theory of Value: The False Coin of Our Own Dreams*. Basingstoke: Palgrave MacMillan.
- Gray, O. (2004) *Demeaned But Empowered: The Social Power of the Urban Poor in Jamaica*. Kingston, Jamaica: University of West Indies Press.
- Grubačić, A., & O'Hearn, D. (2016) *Living at the Edges of Capitalism: Studies in Exile and Mutual Aid*. Berkeley, CA: University of California Press.
- Hirschman, A. (1970) *Exit, Voice, and Loyalty: Responses to Decline in Firms, Organizations, and States*. Boston, MA: Harvard University Press [矢野修一訳『離脱・発言・忠誠——企業・組織・国家における衰退への反応』(MINERVA 人文・社会科学叢書 99) ミネルヴァ書房, 2005].
- Holloway, J. (2013) *Crack Capitalism*. London: Pluto Press [高祖岩三郎・篠原雅武訳『革命——資本主義に亀裂をいれる』河出書房新社, 2011].
- Hopkins, T. (1957) Sociology and the Substantive View of the Economy. In Polanyi, K., Arensberg, C., Pearson, H. (eds.) *Trade and Market in the Early Empires*. Florence, MA: Free Press.

- Hopkins, T., & Wallerstein, I. (1987) Capitalism and the incorporation of new zones into the world economy. *Review* 10 (5/6) : 763–780.
- Kropotkin, P. (2012) *Mutual Aid: A Factor of Evolution*. London: Forgotten Books [大沢正道編『大杉栄選 (クロボトキン) 相互扶助論』現代思潮社, 1971].
- Linebaugh, P., & Rediker, M. (2000) *The Many-Headed Hydra: Sailors, Slaves, Commoners, and the Hidden History of the Revolutionary Atlantic*. Boston: Beacon Press.
- Marx, K. (1992 [1867]) *Capital Vol.1*. London: Penguin [向坂逸郎訳『資本論 第一巻』岩波書房, 1967].
- Marx, K. (1993 [1939]) *Grundrisse*. London: Penguin.
- Mauss, M. (1990 [1922]) *The Gift: Forms and Functions of Exchange in Archaic Societies*. London: Routledge [吉田禎吾・江川純一訳『贈与論』筑摩書房, 2009].
- McMichael, P. (1990) Incorporating comparison within a world-historical perspective: An alternative comparative method. *American Sociological Review* 55 (3) : 385 – 397.
- Perlman, F. (2002) *The Continuing Appeal of Nationalism*. Detroit, MI: Red & Black.
- Pithouse, R. (2006) Struggle is a school: The rise of a shack dwellers' movement in Durban, South Africa. *Monthly Review* 57 (9) : 30 – 51.
- Polanyi, K. (1957) The economy as instituted process. In Polanyi, K, Arensberg, C, & Pearson, H. (eds.) *Trade and Market in the Early Empires*. Florence, MA: Free Press.
- Polanyi, K. (2001 [1944]) *The Great Transformation: The Political and Economic Origins of Our Time*. Boston: Beacon Press [野口健彦・栗栖学訳『新訳 大転換——市場社会の形成と崩壊』東洋経済新報社, 2009].
- Poveda, P. (2003) Trabajo, informalidad y acumulación: Formas de producción y transferencia de excedentes de la industria manufacturera boliviana. *Cuaderno* 30. La Paz: Ceda.
- Preobrazhensky, E. (1965) *The New Economics*, trans. Pearce, B. Oxford: Clarendon Press.
- Price, R. (1996) *Maroon Societies: Rebel Slave Communities in the Americas*. Baltimore, MD: Johns Hopkins University Press.
- Quijano, A. (2000) Coloniality of power, Eurocentrism, and Latin America. *Nepantla: Views from South* 1.3: 533–580.
- Scott, J. (1990) *Domination and the Arts of Resistance: Hidden Transcripts*. Yale University Press.
- Scott, J. (1992) *Domination and the Arts of Resistance*. New Haven, CT: Yale University Press.
- Scott, J. (2010) *The Art of Not Being Governed: An Anarchist History of Upland Southeast Asia*. New Haven, CT: Yale University Press [佐藤仁監訳ほか『ゾミア——脱国家の世界史』みすず書房, 2013].
- Sober, E., & Wilson, D. (1999) *Unto Others: The Evolution and Psychology of Unselfish Behavior*. Boston: Harvard University Press.
- Sousa Santos, B. (2012) Public sphere and epistemologies of the South. *Africa Development* 37 (1) : 43–67.
- Todes, D. (1987) Darwin's Malthusian metaphor and Russian evolutionary thought, 1859–1917. *Isis* 78 (4) : 537–551.
- Tomich, D. (2003) *Through the Prism of Slavery: Labor, Capital, and World Economy*. Washington, DC: Rowman and Littlefield.
- Turner, T. (1986) Production, Exploitation and Social Consciousness in the “Peripheral Situation.” *Social Analysis: The International Journal of Social and Cultural Practice*, 19, 91–115.
- Wallerstein, I. (1974) *The Modern World-System I: Capitalist Agriculture and the Origins of the European World-Economy in the Sixteenth Century*. New York: Academic Press [川北稔訳『近代世界システム I——農業資本主義と〈ヨーロッパ世界経済〉の成立』名古屋大学出版会, 2013].
- Wallerstein, I. (1988) *The Modern World-System III: The Second Era of Great Expansion of the*

- Capitalist World-Economy, 1730s-1840s*. New York: Academic Press [川北稔訳『近代世界システムⅢ——〈資本主義的世界経済〉の再拡大 1730s-1840s』名古屋大学出版会, 2013].
- Wallerstein, I. (1991) *Geopolitics and Geoculture: Essays on the Changing World-System*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Wright, E. (1978) *Class, Crisis and the State*. London: Verso [江川潤訳『階級・危機・国家』中央大学出版部, 1986].
- Wright, E. (2010) *Envisioning Real Utopias*. London: Verso.
- Zibechi, R. (2010) *Dispersing Power: Social Movements as Anti-State Forces* (R. Ryan, Trans.). AK Press.
- Zibechi, R. (2012) Subterranean echos: Resistance and politics 'desde el Sótano'. *Socialism and Democracy* 19 (3) : 13-39.